

令和元年6月4日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02266

研究課題名(和文)「具体美術協会」再考 複合的視点から見直す戦後日本美術の一断面

研究課題名(英文) Reconsideration of Gutai Art Association from Plural Viewpoints

研究代表者

加藤 瑞穂 (Kato, Mizuho)

大阪大学・総合学術博物館・招へい准教授

研究者番号：70613892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、関西に生まれた戦後日本を代表する前衛美術グループ「具体美術協会」(略称：具体、1954-1972年)を、これまで掘り下げられていない複数の視点から再考し、新たな「具体」像を提示した。主に大阪大学総合学術博物館に寄託されている具体関連資料を次の三点に着目して精査し、適宜関係者への聞き取り調査を行った。その視点とは、第一にメンバーの固有性を明らかにする、第二に戦前からの流れの中で見直す、第三に、同時代の他の前衛美術や隣接分野とのつながり、ひいては当時の関西の社会といった、より広い文脈の中で再検討するという三点で、その成果を合計三回のシンポジウムや複数の口頭発表・論文を通して公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、「具体」の従来の解釈を再検討し、より包括的な視座を具体的に提起し得た点、また学術研究の蓄積が他の時代に比べて極めて少ない戦後日本美術の言説を、多様かつ精緻にする一助になった点である。また社会的には、研究成果を反映させたシンポジウムの開催とその書き起こしの公開によって、ここ数年で美術市場での注目の度合いが格段に高まったこのグループについて、理解を深めるきっかけを提供できた点が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study reconsidered Gutai Art Association (Gutai, 1954-1972), one of the major postwar Japanese avant-garde groups, founded in Kansai area, from three viewpoints. The first one was to clarify the personalities of its members, the second to examine its root in the prewar period, and the third to rethink it not only in the comparison with other avant-garde groups or other fields of art in the same postwar period, but also in the context of the society of Kansai. Gutai related materials deposited to the Museum of Osaka University were mainly studied from these viewpoints, having some interviews with former Gutai members or related people. The result was made public at three symposiums, several presentations and essays.

研究分野：近現代美術

キーワード：具体美術協会 前衛美術 戦後日本 吉原治良 田中敦子 金山明 近代大阪

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年前後に始まった「具体」に関する調査研究は、2010年代初頭にかけて国内外で進み、多数の回顧展が開催されてきたが、それは主にグループとしての全体像の解明に力点を置き、総勢50名を超える個々のメンバーについては、主要な数名をのぞいてまだ精査が進んでいない。また、「具体」では描く行為や素材の質感を強調したスタイルが主流とみなされてきたが、必ずしもそれに合致しないメンバーも複数おり、「具体」の実像に迫るためには、その多様性を明らかにする必要がある。加えて「具体」のこれまでの研究では、共時的・通時的な視点がほとんど採られず、孤立した存在として扱われてきた点に課題があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の課題をふまえ、等閑に付されてきた次の三つの視点を組み合わせて、「具体」の実像をより明確に示すことであった。第一にメンバーの固有性を浮かび上がらせる[視点1]、第二に戦前からの流れの中で捉える[視点2]、第三に同時代の他の前衛美術や隣接分野との関わり、さらには当時の関西の社会における位置づけといった、従来よりも広い文脈で考察する[視点3]というものである。それによって、激しい描画行為や重厚な質感が特徴とみなされてきた「具体」の見方を多様化すること、また戦前の前衛美術とのつながりを検証すること、そして同時代の前衛美術との共通点と相違点を明示すると共に、大阪固有の文化的特質の有無について解明することを目標とした。

3. 研究の方法

上記で述べた視点1に基づいて、大阪大学総合学術博物館寄託の「具体」に関する未整理資料のうち、「具体」では主要メンバーでありながら、典型的なスタイルではなかった田中敦子、金山明、上前智祐の資料を2016年度から三年にわたって精査し、資料内容を概観できるデータベースを作成した。また視点3に則って、グループ「極」に関する同館所蔵のまとまった作品資料も並行して精査し、同じくデータベースを作成すると共に、それらを補足する意味で、「具体」および「極」関係者への聞き取りを毎年二名ずつに行った。視点2については、主に大阪中之島美術館(大阪新美術館より改称)建設準備室所蔵の「具体」関連資料のうち、リーダー・吉原治良による戦前の多数の素描を検討し、戦後との連続性を考察した。

これらの成果を広く公開するために、2016年度から2018年度まで毎年一回、視点1、2、3をふまえたテーマで、複数の研究者もしくは作家を招聘しシンポジウムを開催した。そのほか、研究代表者は複数の口頭発表や論文でも研究成果を発表した。

4. 研究成果

本研究の成果は、従来よりも幅広い文脈で「具体」を再解釈し、主に三つの側面から新たな「具体」像を提示した点にある。具体的には第一に、激しい描画行為や重厚な質感を典型的なスタイルとする捉え方の見直しで、それに当てはまらない代表的存在である田中敦子、金山明らの資料を調査し考察することにより、メンバーたちはスタイルではなく、描く「行為」と「素材」のあり方を問い直す方向性において一致していることが明らかになった。

第二に、「具体」は戦前期の前衛美術と直接的なつながりを持っていた点を明るみに出した。主にリーダー・吉原の1930年代の素描を精査すると同時に、当時の先鋭な美術に関する言説、とりわけ吉原と親しかった長谷川三郎による評論を丹念に読み直すことにより、吉原がシュルレアリスムと抽象美術という1930年代のヨーロッパにおける前衛美術の潮流をいかに解釈し、自らの作品を創造したか、その経緯をたどることができた。そして戦後の「具体」概念の源流は、吉原が長谷川を通して学んだ、ヨーロッパの抽象美術における「コンクリート」の概念にあると判明した。

第三に、「具体」を同時代の他の前衛美術グループや美術以外の分野との関わり、ひいては関西の文化といった幅広い文脈で捉え直すと、その特質をより明瞭に把握できた。例えば「具体」と活動時期が重なる「デモクラート美術家協会」や「実験工房」と比較すれば、「具体」は、現実と異なる新たな意味の付与ないし読替えよりも、素材となる物質自体の特性を重視し、そこから未知の意味を生む造形を目指した点、そして自らの活動を国内外へ告知するための戦略的意識を明確に持っていた点が独自であった。また広報・広告への意識の強さは、吉原自身が会社社長だったゆえと推察され、さらにはそうした生活に密着する美術のあり方や、ユーモラスであり且つリアルであることを是認する姿勢は、「具体」以前の大阪の作家が持つ特性でもあったことが確認された。

これらの研究成果は、「具体」の定型的な語りを変化させ、これまでにない言説や視座を生む契機になるだろう。それと共に今後、個々のメンバーへの関心がいっそう高まり複数の研究が蓄積されること、あるいは写真や映像等の複製可能なメディアと吉原、大阪の文化と具体など、まだ十分に考察されていない重要な論点を掘り下げることにもつながると予想される。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

加藤瑞穂、吉原治良と長谷川三郎のつながりに見る「具体」概念の源流、査読有、民族藝術、第35巻、2019年、90-97頁

加藤瑞穂、金山明の電動機器による描画—具体美術協会におけるその意義—、査読有、美術史、第183号、2017年、1-16頁

〔学会発表〕(計7件)

橋爪節也、大大阪の時代と前衛絵画—前田藤四郎の場合、シンポジウム「具体 再考 第3回 大阪と前衛美術」、2019年

加藤瑞穂、具体美術協会の野外展と再制作、平成30年度大阪大学総合学術博物館研究発表会、2018年、招待

加藤瑞穂、具体美術協会の再制作作品、第8回東海大学テニユアトラック制度国際シンポジウム「勅使河原蒼風の時代—近現代美術の保存・修復・再制作をめぐる—」、2018年、招待

加藤瑞穂、連続鼎談 吉原治良編、「小磯良平と吉原治良」展関連イベント、2018年、招待

加藤瑞穂、吉原治良の「物質」をめぐる思考、シンポジウム「具体 再考 第2回 1930年代の前衛」、2017年

加藤瑞穂、0会の活動、シンポジウム「具体 再考 第1回 1950年代の前衛グループ」、2016年

加藤瑞穂、金山明の電動機器による描画—具体美術協会におけるその意義—、第69回美術史学会全国大会、2016年

〔図書〕(計2件)

永田靖編(永田靖、市川明、加藤瑞穂ほか、全16名)、大阪大学出版会、維新派の時代、2019年、頁数未定

中塚宏行編(中塚宏之、加藤瑞穂ほか、全3名)、上前智祐記念財団、上前智祐日記 1947-2010、2019年、頁数未定

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

大阪大学総合学術博物館ホームページ・シンポジウム書き起こし

第3回：<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/2018-11-13-12875/>

第2回：<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/2017-11-01-11923/>

第1回：<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/2016-10-31-11092/>

大阪大学総合学術博物館ホームページ・年報

第2回(年報2017、35-38頁)：

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2018/10/991332efa4fe6418bd5e79a5d9b3a8d6.pdf>

第1回(年報2016、55-57頁)：

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2017/11/57a33508e9b004a146d3a4352f0fd22b1.pdf>

新聞報道

第2回：『毎日新聞』大阪夕刊、2017年12月28日

<https://mainichi.jp/articles/20171228/ddf/012/040/008000c>

第1回：『毎日新聞』大阪夕刊、2016年12月22日

<https://mainichi.jp/articles/20161222/ddf/012/040/020000c>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：橋爪節也

ローマ字氏名：HASHIZUME, Setsuya

所属研究機関名：大阪大学

部局名：総合学術博物館

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 70180817

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。